

ゆかりんと僕の美醜逆
転録

白夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら知らない木目の天井。無造作に敷かれた布団。

そこで出会った妖怪「八雲 紫」は、とてもスタイルが良く、顔立ちもしつかりとしている美人な人。だが、それはこの世界では、不細工、と言う部類に入るのであった。

そんな自分のことを悲観する紫と、とある男の物語。

目次

出会い

1

出会い

「ふあゝ、ああゝ。」

「紫様、欠伸し過ぎです。今日でもう64回目ですよ。」

「何で数えてんのよ!!」

そうツツコミを入れるのは、「八雲やくも 紫ゆかり」。

幻想郷最古参の妖怪で幻想郷の境界を操る能力を持つ実力者。賢者の異名も持つ。式として八雲藍を従えている。

この世界において「スキマ妖怪」という通称で呼ばれることもあるが、基本的に種族名はない。

そして、紫に仕えているのが紫の式神「八雲やくも 藍らん」。藍は主人である八雲紫の屋敷に同居しているが、その式である橙は妖怪の山に住んでいる。なお、「八雲藍」と言う名前は式神を憑けるに際して八雲紫が与えた名前なので、式神が憑いていない状態では藍とは呼ばれない。

と、そんな彼女達にもある問題があるのだ。

彼女達の容姿は、白い綺麗な肌。そして、整った顔。胸もいい感じに膨らんでいてス

タイルも良く、くびれもしっかりついている。だが、そのスタイル、容姿の良さはこの世界で言う、不細工なのだ。

「籃く、今日も私の運命の人はいないのかしらく？」

「ええ、居ませんね。残念な事に。」

「そう。じゃ、昨日仕掛けておいたスキマに誰か引つかかっているかなく？」

紫はそう言いながら、スキマを仕掛けたと思われる場所に鼻歌交じりに向かっていく。

これが紫の日常的な動きで、紫は毎日スキマを外の世界の何処かに繋げて置いて、朝確認しに行く。と言う謎の行動を繰り返しているのだ。

そんないつも通りの紫を籃は呆れるように見つめて、一言ポツリと呟いた。

「紫様、幻想郷に男はあまり来てはいけない筈では……？でも、まあ、私達今には、必要ですよね。」

☆☆☆☆

「つ痛てて……ここは、何処だ？」

目を開ければ一番最初に目に入ったのは、知らない木目の天井。

床には、布団が無造作に敷かれており、ここで寝ている人は、寝相が悪いと言うのが見て分かる様子だった。

「そう言えば、何でここにいるんだっけ……」

男は記憶を辿ろうとするが、一向に思い出せない。

唯一覚えているのは、自分の名前や、容姿のみ。他に関することは、記憶に鍵がかかったかのように、知る事、思い出す事が出来なくなっていた。

と、そんな時だった。部屋の襖が勢いよく開いたのは。

髪は金髪ロングで、先を結んでいて、瞳の色は金色。顔立ちは整っていて、容姿も完璧。日本に一人いるかいないかぐらいの美少女。

その女の人は、目を見開き暫くの間動かさず、硬直していた。

「えっと、誰ですか?」

「お、男…… や、やったわ!! ついに私にもこの時が!!」

その女性は、その場で感極まったように号泣しだす。

その女性に男の声は聞こえていないらしく、男が何度呼びかけても反応しなかった。しかし、男はめげずに、ありのままの事をしっかりと伝えた。

「そんなに泣いてると、綺麗な顔が台無しですよ?」

綺麗…… その言葉に反応した紫はその場でピタツと立ち止まると、男の方を恐る恐る振り返る。そして、訪ねた。

「わ、私の顔が？」

「ええ、そうですよ。つて言うか、顔と言うか容姿全て、ですけどね。」

男は笑顔でそう言う。

そんな男に何を感じたのか。紫はいきなりその男に飛び付いたのだ。

流石の男もこれは予想外だったそうで、驚いた様子をみ開いている。

「えっと、どうしたんです？」

「うわーん。」

「えっと、嘘泣き、ですよね？」

「えへへ。」

男は少しだけ、紫の髪に触れる。また、紫も少しだけ彼の頬に触れていた。

そして、紫は顔を上げると、男に自己紹介をした。

「本当に突然でごめんなさい。私の名前は、「八雲紫」。貴方は？」

「僕の名前は、「倉石くわいし 白蓮びやくれん」。ここに来た理由とかは全部覚えていない。」

「そう…… それは、悪い事をしたわ。」

紫は罪悪感からか、少しだけ頭を下げてポツリとそう言う。

しかし、何が悪いのか分からない白蓮は、紫に尋ねた。

「どう言う事？」

「実は……」

☆☆☆

「そ、そうなんだ。」

「本当に申し訳ないわ。」

白蓮の前には、地面に膝をついて頭を下げている、いわゆる土下座姿の紫がいた。

しかし、紫の話を聞いても別に何も感じなかった白蓮は、膝を曲げしやがむと紫に声をかけた。

「いや、謝らなくていいよ。そんな事より、さ。」

「な、何かしら？」

紫は彼から「嫌われた」。と思っていたのか、少しだけ怯えた様に聞き返す。

「僕ってここに住んでもいい？」

「も、勿論よ!!」

紫は顔をパアツと明るくさせ、白蓮の方を見上げると、早速と言うか再びまた地面を

蹴ると白蓮の胸めがけて抱き着いた。

「わっ、とと、危ないですよ。紫さん。」

「んーん、ゆかりんって呼んで。」

紫は白蓮の胸元に頭をスリスリしながらそう言う。

過去の記憶がないせいかな、こう言う体験に慣れていなかった白蓮は少しだけ斜めの方
向を向きながら言った。

「これからよろしくね。ゆかりん。」

「ええ、よろしく白蓮。」

二人は、そう言って笑うと暫くの間その体制で動かなかつたのだった。